

遊学俳句

矢野達生選

優秀

我が足の適う道程菊花展

大谷 一正(藤 山)

(評) 菊薫る季節が巡って来た。今年
は、自分の足に適う道程——自分の
足の状態に合わせて、近くで催
される菊花展を見に行くことに
しようという句意。

老齢に達した身の処し方を淡々と
詠まれた姿に惹かれました。

常緑樹えくぼとなりて山笑ふ

近倉 利子(関屋北)

山積みの古本崩る一葉忌

森岡 節子(西真美)

桜散る風の行方を示しつつ

浜口 福子(関屋北)

歌留多読む母の口調となりてをり

岸 和子(逢 坂)

菊人形生命吹き込む技の冴え

堀 澄子(藤 山)

藤波や嬰兒は母の背に眠る

高谷 康子(西真美)

高原の遠く近くに蕎麦の花

森井 眺美(鎌 田)

白波に磯笛溶けし海女の春

小原真智子(五位堂)

胴綱に命預けし松手入れ

河村 須賀子(畑)

突堤に人が溢れし鯨日和

藤井 友香(磯 壁)

息白し塵ひろいつつ児らが往く

花瀬タツノ(磯 壁)

天才の短命想ふ牡丹雪

西山大之進(磯 壁)

菊日和童に戻るクラス会

山本トミ子(五位堂)

矢車の光はじきてまわりをり

川瀬清津矢(下田西)

(総評)

俳句は(一)新鮮な素材、(二)生きた季語、(三)五七五のリズム、(四)切れ字などの統合によつて佳句となります。今回も、これらの基本に長じた作品が選に入りました。

なお、「遊学俳句」にこの六年間欠かさず投稿され毎回入選の実績を残された近倉利子さん、森岡節子さん、浜口福子さんの俳句による熱意に心をうたれました。

エーゲ海の汀に遊ぶ夏帽子

達 生

遊学短歌

二城しづ子選

優秀

難解語辞典繙くわが背なに

齊藤富美子(穴 虫)

(評) この頃、特に若い人の語彙が
少なくなっている。解らなければ
まず調べる事。明治・大正の
文章でさえ読み難いものでは、古
き良き伝統も廃れてしまう。

辞典を繰るひととき、静かな
図書室の雰囲気とリラックスす
る作者の姿勢が見えるような
下句の表現が良い。

もみぢ葉のさやぐを見ればわが上を
過ぎし歳月の濃淡想ふ

内藤 典子(北今市)

あふれくる木々の芽吹き輝きて
生れし嬰兒声高々と

井上 菊子(北今市)

ぎこちなく操る友の車椅子
励ます如く鵲猛りゆく

大谷 一正(藤 山)

われなりに楽しみ生きん改まる
二十一世紀と、この未知の世を

島田 政子(北今市)

小手毬を揺らす風さへなき午後を
調律師はただ音を決めをり

中谷 滋子(藤 山)

里山を守り次代に残さんと

ボランティアの人ら柴を刈りゆく

浜口 信子(良福寺)

水溜まりに花びらひらりと

舞ひこむを覗き込みたる高層ビルら

中間 伸子(穴 虫)

児らの声残し暮れ初む園庭に

風の遊びてふらこ揺れる

森岡 節子(西真美)

動物園さながらなりし卓の上

みんな可愛いわが編みぐるみ

河村 須賀子(畑)

一点に力集めて鍋磨く

いつしか口を固くとからせ

山本 晴子(真美ヶ丘)

新築の家に掛かれる表札に

足止めローマ字を拾ひ読みゆく

中島都思子(藤 山)

父眠る丘に登りて娘とうたふ

父のおはこの「ふるさと」の歌

田熊 禎子(真美ヶ丘)

パフソルのレースの目より洩るる陽は
わが歩みゆく肩のへに揺る

田中 操(逢 坂)

人の世の酸いも甘いも身にまとい
辿り着きたる古稀は目の前

山本トミ子(五位堂)

(総評)

同じ水を吸いながら花は紫にも
純白にも、それぞれの粋を尽くして
精いっぱい咲く。同じ状況下にあつ
ても、人それぞれに感応の相違があ
るはず。それを個性という。短歌を
生き甲斐とする人を応援しつつ、そ
の人ならではの煌めきに期待したい。

逝きし子を黄河に投げしと詠みし友
ごころを病みてかこのごろ会はず

しづ子

募集しています。

遊学俳句及び短歌では、ご投稿
をお待ちしています。

自作未発表の作品に住所、氏名
をご記入のうえ、葉書または封書
で係までお寄せください。

一人三作品まで俳句、短歌を別々
に応募してください。

◆締め切り／平成十四年四月末
◆宛て先／〒6339-0292

香芝市本町 三九七番地
香芝市役所 企画政策課

「香芝遊学」編集係

